

少年の更生を見守る 篤志面接委員



今春、新聞紙上で9割近くの人が「家族の「きずな」が弱くなっていると思う」と答えたというアンケート結果の記事を読みました。これは、職場でも家庭においても経済優先で目先の利益に追われ、家庭が心休まる場所でなくなったからかも知れません。さらに昔に比べ、子供も元気が無いように思います。また、本来信じられないような犯行に及ぶ昨今のニュースを聞く

と、大変心が痛みます。そこで今回は、弁護士としての活動の傍ら「篤志面接委員」として、非行に走った子供たちの更生に携わる大川哲次氏(60)にお話を伺いました。

篤志面接委員とは、受刑者や少年院に在院している少年たちの相談に乗り、助言、指導、教育を行う民間のボランティアのことです。大川さんが担当されている少年院の一つである浪速少年院(大阪府茨木市郡山)は、窃盗、強盗、恐喝罪などで家庭裁判所から保護処分として送致された初等(おおむね12歳以上16歳未満)、中等(16歳以上20歳未満)の男子約120人を収容しています。ここは、全国の53の少年院の中でも、社会復帰に向け、電気工事や木工・溶接・金属加工などの高度な技術指導が行われている西日本唯一の職業訓練専門施設です。院生は約1年間、午前6時45分に起床し、21時30分に就寝するまで、厳しい規則の中で生活します。大川さんは、「少年が犯罪に及ん

だ環境の共通点として、家族間のコミュニケーションが十分でないことが上げられる。親は子供に過剰な期待をかけてしまいがちで、それがストレスになっていく」といいます。

大川さんの院生に接する姿勢は、まず院長に院生の話を聞き「こうしたら良いのに・・・」と説教ではない、助言をするというものです。それは、命の大切さを知らないから人を危めたのだと考えているので、月1回の少年たちの個別指導では、自分と他者の存在の重さ―命について―を話すそうです。「罪を犯した子供であっても、母親は自分のお腹を痛めて生んだ子供は、自分以上に大切に思っている。出院したら、家族あつての自分だから、今までの非を心より詫び、感謝の気持ちを持つこと。すべての生きものの命は同じであるから、小さな蟻であっても決して踏みつけてはいけない」と話すのだそうです。犯した罪は憎むべきものであるが、命の大切さを教えられなかった少年も一方では被害者であるという観点で論ずると、今までになかった素直で優しい部分があるから、小さな蟻であっても決して踏みつけてはいけない」と話すのだそうです。大川さんからこんな話も伺いました。以前、結婚資金欲しさに強盗殺人の罪を犯し、死刑の判決を受けた青年がいました。担当検事は、残された日々、青年の中にあるはずの優しい心を引き出そうと、当時、小学2年生だった自分の娘さんと文通させたそうです。文

ほめることが大切であることを伝え、埋もれ、消えかかっていた家族の「きずな」が育まれるよう心を砕いているとのことでした。

また、更生期間を終え出所する際には、「自分の中にある素直で、優しい心をもっと大きく育て、他人に迷惑をかけそうになったら立ち止まり、考えることができる人間になること。」「仕事に就いていないのが犯罪のもとになるから」何かの職に就くこと。サラ金などから借金しないこと。趣味を持つこと」を少年と約束します。そして、背伸びせず、自然体で生きてほしい、二度と罪を犯すな、戻ってくるな、と心から願うそうです。

少年院は、罪を犯した少年が、大川さんのような大人数の助言によって、必ず立ち直る事を決意し、努力できるように作られた施設です。厳しい院内生活の中で、運動会など特別に家族と対面する機会もあります。親御さんは生まれ変わろうとされている我が子の姿に、今まで見えなかった、見てい

「西の魔女が死んだ」
梨木 香歩 著

十三歳の主人公「まい」は「あそこはわたしにとって苦痛を与える場所ではない」と言って学校へ行くのをやめ、母方の祖母(主人公は魔女と思っている)と暮らし始めます。そこで彼女は「ニヤリ」と魔女のように笑うおばあちゃんのもとで「魔女修行」を開始する。魔女といっても、箒に乗って飛ぶわけではなく、自分に必要な情報をキャッチできる能力のこと。その能力を手に入れるためには心と体を養うことが必要で、衣食住をきっちりとする、全て自分の意志で決める、など基本的な事が大切になる。この基本が彼女にとって難しい事だった。けれどもそれを実践してゆくことで、自分で決めたことは

着実に実行できる行動力を手に入れて、再び学生生活に戻る。「おばあちゃんと暮らす」というフレーズに、「どんなおばあちゃんか?」と知恵が見れるのかなあ?とわくわくしながら読み始め、次に、きれいな言葉や表現に引き込まれ、まるで自分が一緒に体験している気分になった。最近、私も衣食住の大切さをひしひしと感じているので「やっばり衣食住よ」と言いつつ元気にご飯を作っています。

「神々の食」
池澤 夏樹 著
垂見 健吾 写真

「あつ、池澤夏樹の新刊が出てる!」鮮やかな市松模様配置された表紙の食材の写真を釘付けになり、本を手に取りました。ここでは、毎日の家庭の食卓に出る食材や料理が紹介されています。食材は全て沖縄の地のもの。農家の人や市場の人が、時間と手を掛けて、ようやく消費者の口に入るものばかり。「人の口に入るものを用意する際の基本は誠意である」という本文の言葉は、人が生きるための基本である「食べろ」という行為について、考えるきっかけになりました。私に供された「いのち」を食べる。誠意を持って供されたいのちは、誠意を持って

「この本と私」
扶紀子

新潮文庫

の時」に起きている事は結果であり始まりでもある。「始まり」を意識することが大切だと想った。普段の暮らしの何気ない行動や言葉に不思議なミステリーが潜んでいる。作者のたおやかな視点に感じ入りました。そしてもう一つの楽しみは、推理小説に必ずついている「意外な展開」です。クスリとほほ笑ましい物、ちよと怖い話、ゾーッとする結末、など盛りだくさん。この物語のほかに六篇が載っています。秋の夜長を楽しむためのとっておきの一冊になりそうです。

「成り上がり」
矢沢 永吉 著

本書の中には、矢沢少年が、EYANAMIになっていった、その過程が書かれています。矢沢永吉が、才能や勢いだけでロックスターになっていったのではなく、スターになるための戦略を立て、行動し、スターになっていったという事を知り、とても驚きました。その行動はとも力強く、その勢いに引き寄せられて多くの人が彼の元に集まってくる。同時に、その勢いは集まってきた人達との間に溝を作った。その溝を受け入れ、明らかにする事で、夢を夢のままに終わらせず、現実のものにして行きます。人と関わりの中にある小さな罫、に対して敏感になれるかどうか。そういった小さな



「地下街の雨」
宮部 みゆき 著

ホッと一息ついて・・・そんなときに手にした本でした。地下街に「雨」? 地下街は雨とは無縁のはず。なぜ雨なんだろう? どんな雨が降るの? ステージは、大きなガラス窓のある地下街の喫茶店、通りゆく人々の仕草や様子が見える。肩の水滴を払う、濡れた傘をたたむ、人の動きで地上の天気が分かる。街の様子まで想像する。景色もうつろしく描かれている。暮らした風景が美しい言葉で切りとられる。私の心の中で切り取られた言葉をパズル(断片)として組み立てる。パズルを完成させてゆくときのような集中力と、ドキメキを覚えた。日常生活で起きている事柄全てに個人的な意味があり(今こ

「成り上がり」
矢沢 永吉 著

本書の中には、矢沢少年が、EYANAMIになっていった、その過程が書かれています。矢沢永吉が、才能や勢いだけでロックスターになっていったのではなく、スターになるための戦略を立て、行動し、スターになっていったという事を知り、とても驚きました。その行動はとも力強く、その勢いに引き寄せられて多くの人が彼の元に集まってくる。同時に、その勢いは集まってきた人達との間に溝を作った。その溝を受け入れ、明らかにする事で、夢を夢のままに終わらせず、現実のものにして行きます。人と関わりの中にある小さな罫、に対して敏感になれるかどうか。そういった小さな

掲載広告募集中

御堂筋新聞は我が国初のタウン誌として1970年に創刊されました。以来38年の間、御堂筋周辺のビジネス街で働く20代30代の女性をはじめとする、幅広い層の読者の方々に支持されています。読み記事を中心とした編集内容で、楽しく役に立つ情報を発信するタウン誌を目指しています。

□企業・店舗

新製品の発表 イメージアップ広告

新規オープン告知 スタッフ紹介

□サークル・個人

会員募集 イベントの告知

個人のPR 写真や絵画の作品発表 など

・バナー広告も募集しています。料金等はお問い合わせください。

株式会社ファッションビジネス『御堂筋新聞』 TEL 06-6260-0071 FAX 06-6260-0037
E-mail: staff@mido-suji.com

※広告の目的、内容によっては掲載をお断りする場合があります。